

大阪市立大学難波宮址研究会

難波宮址の研究

研究予察報告第三

古代都京址の研究は、古代国家解明のためにすぐれて重要な意味をもつものであるにもかかわらず、著手されてから日も浅く、未だ十分な進展をみるに至っていない。今日明確に宮殿址と認められるものは、藤原宮・平城宮のみであり、これらに加えて、わずか長岡京がほぼ推察可能な段階にあるに過ぎない。

今度『難波宮址の研究』が、難波宮址研究会の手によつて、前二回に引きつづき三冊目の研究考察報告として公刊されるに至つたことは、このような都京址研究の現段階においては、研究の進展に重要な寄与をなすものと言わねばならない。

本書の構成は次の如くである。山根徳太郎氏「孝徳天皇長柄豊碯宮の研究」・滝沢真弓氏「黄金分割」と建築の比例問題」・藤原光輝氏「難波宮址第八次・第九次発掘調査報告」・沢村仁氏「難波宮址第十次発掘調査略

報」・直木孝次郎氏「記紀を中心とする古代難波年表」・附録「山根氏「難波宮発掘調査について」」。

山根氏の論稿は、論点は多岐にわたるが、いろいろの視角から文献を駆使されて長柄豊碯宮を法円坂町一帯の当該地に比定し得ることを論じた力作である。滝沢氏は、石田茂作氏が奈良時代の寺院建築に「黄金截」がみられるという見解に対して、ギリシヤ以来のヨーロッパの数学・美学上の問題を整理され、単純に「黄金截」という概念を日本古代の建築に導入することの危険なることを論じておられる。藤原氏の報告において注目されるのは、聖武天皇難波宮址と推定される廻廊址に先行する廻廊址が発見され、それらが、①前者に比して小規模なこと、②柱穴に焼土を含むこと、③この遺構に伴う瓦の発見されないこと、④堅穴住居址の埋立てられた上に構築されていることなどから、長柄豊碯宮に比定されるものと推定していることである。本稿は山根氏の論稿と合せて、本書の中心をなすものである。沢村氏の報告からは、前二者の中間に位する遺構が確認されたことが知られ、今後の調査研究が期待される。直木氏の作成された年表は古代難波研究の史料を整理

されたもので研究者に多大の便宜を与えるものと信ずる。尚、附録の山根氏の一文は、これまでの調査の成果と経過を要約されたもので、本報告書を始めて手にする人にとつてはよき配慮といわなければならぬであろう。

以上、要領を得ない紹介を試みたが、本書の内容はこれにつきるものではない。先例の内容を示す如く都京址の調査は長年月にわたる断続の努力を必要とする。すでに八年、延べ五百余日にわたる、困難な条件をおしでの、調査団のたゆまざる研究に、私は深い敬意を払うとともに、今後の御健闘を祈つて紹介の筆をおきたい。

(本文八九頁・英文二九頁・図版五八・実測図五・陸地測量部「天王寺」(明治十九年)「吹田」(同十八年)二万分一地形図ヘコタイプ)昭和五年三月 大阪市立大学 難波宮址研究会発行 非売品 (原 秀三郎)

新訂増補国史大系

尊卑分脈

尊卑分脈は周知の如く室町時代以前の諸家の系図を集大成したものであつて、公家武家

諸氏の姓氏家系を調査するばあい、現存する諸系図のうちでもつとも信頼性の高い系図として著名のものである。それに人名のかたわらに記された個人の経歴に関する注記は、史料の欠けたところを補うに足るものがあり、その点でも価値の高い文献である。

本書の編集を企画し着手したのは左大臣洞院公定（一三四〇—一九九）であるが、以後も洞院家が事業を継承して重修改訂し、さらに後人によつて増補訂正転写されつつ流布した。そのため種々の異本ができ、巻数・篇目の序列が異なり内容に出入のある諸本が伝わっている。

これまで我々が尊卑分脈を調べようとするばあい普通に利用したのは故実叢書本であり、それが唯一の流布本であつた。「故実叢書」は明治三二年から三九年にかけて、吉川弘文館から出版された公事・儀式・官職等に関する大部の叢書である。従来流布本尊卑分脈はその第三集に収められ、和装活版の一冊本として、明治三六・七年に刊行された。（大正一三年にはその索引が出された。）昭和三年から八年にわたつて「故実叢書」の増訂版洋装本が出版されたが、尊卑分脈はその後除かれて再版されなかつた。それ故に研

究者は依然として初版の和綴本を利用せざるをえず、そのような旧本であるため入手して座右におくことはまず望めないという不便な状態にあつた。また故実叢書本は内容的には若干の諸本の校合改訂を経ており、明治の活字本としてはかなり優良で、現在まで長期の利用に堪えてきたが、印刷技術の関係で写本の古体の変更され、時に誤りをおかしている箇所もある。したがつて入手しやすく、また緻密な校訂を経た定本の出版は、学界の真に渴望するところであつた。

その意味で、かつて先駆的な故実叢書本を刊行した吉川弘文館から、新訂増補国史大系の最後を飾る雄篇として、尊卑分脈本文四冊および索引一冊の出版が実現しつつあることは、今後の研究の進展のために極めて大きな意義をもつものである。すでに昭和三二年五月に第一篇（藤原氏前半）、三三年一月に第四篇（平氏以下諸氏）が発売され、また続いて三四年三月に第二篇（藤原氏後半）が発行になり、引続き第三篇（源氏）と別巻索引が出される予定である。

この国史大系本は故実叢書本と比較してもまったく面目を一新している。すなわち故実叢書本は、宮内庁書陵部所蔵一本を底本とし、

さらに前田家所蔵脇坂氏本および同家所蔵一本によつて増補改訂したものとされ、この国史大系本はそれと底本を異にし、従来知られておらずしかも諸本中もつとも善本というべき、前田家所蔵林家訂正本を底本としている（これまでは前田家所蔵脇坂氏本がもつとも善本であるとされてきた。国史大系本第四篇平氏以下諸氏は同本を底本とした）。そしてそれを、同訂正本所引一本、同家所蔵脇坂氏本、同所引一本、同家所蔵一本、同所引一本、国会図書館支部内閣文庫本、同所引一本および故実叢書本等の諸本をもつて精密に校訂し、さらに加えて、六国史以下の史書、補任類、古記録、諸系図から物語類に至る多数の史料によつて懇切な校註を施している。長期間多方面にわたる膨大な数の人物それぞれについて、名称・血縁関係・経歴の異同を多くの文献によつて一つ一つ校勘してゆく努力は、実に大きなもので、通常の古記録・古文書出版の及ぶところではない。

本書の体裁は可能な限り底本の古体に従い、系線の形や注記の位置も旧の形を損じないように組まれている。尊卑分脈を筆写すればすぐわかることであるが、旧体を変えずし

かも人名をきれいに配列することは、実に繁雑で困難である。このように詳細多岐な系図の組版がいかに困難なものかは想像するに余りがある。また尊卑分脈を利用したとき誰しも感ずることであるが、大規模な系図であるために系線が多くの頁にわたって延々と続き、父子の関係をたどるのに手間どることがある。本書ではそのような不便を除くために、系線の右端に父の名を注記してくれている。まことに至れり尽せりである。本書はその学界にたいする深甚な貢献によつて、文部省の研究成果刊行費補助金の交付をうけた。

最後に、幾多の隘路を克服してこのように立派な定本を提供された国史大系編修会および出版関係者に敬意を表すると共に、残る第三篇と別巻索引の刊行が一日も早く実現することを切望しつつ、拙い紹介を終える。

(第二篇 B5判 五四八頁 昭和三十四年三月 吉川弘文館発行 定価二、七〇〇円)

(戸田芳実)

## 日本城郭協会編

### 日本城郭全集

近年の城ブームがどのような動機でおこつて来たかは知らないが、工場の煙突の向うに天守閣がそびえる景観もまんだらではない。イギリスのドーバアの白壁の屋の下に列ぶフラットの屋根から、ローマ時代以降そびえて来た名城をながめた印象を忘れることが出来ない。日本ラインと犬山城、湖畔にそびゆる彦根城、城はまた歴史の国日本がもつ文化財でもある。

だが一先ずその学問的研究はとなると、そんな生やさしくロマンチックなものではない。従来とも日本では城の研究は建築史家により行われてきたほか、城といえば大類仲や島羽正雄等の歴史家もまた関心をもつて来た。一方城と切り離せない城下町の研究また故小野均その他の歴史家、それに一部の地理学者もこれを封建時代の地方都市という観点から取扱つて来た。本書はコロタイプ製の城の写真を中心に、内容の解説や資料の一覧を従にした一般向き美術全集式のいわば図録集ではあるが、それにしても内容構成は極め

て学問的であつて、今はなき明治初年撮影当時の古い写真が数多く収録されていて、各巻八一九〇〇円程度の高価さを補っている。大類、島羽等歴史家のほか田辺泰、岸田日出力、藤島亥治郎等の建築史家の監修になり全十巻中、一卷を古写真、資料編に、他の二巻を上世・中世の城、及び近世の城、概論に分けるほか九州、四国、近畿、中部、関東、東北、北海道と地方別に七巻に分けている。既に数冊出版されており、解説では各城の遺構、沿革、築城、構造の順に城そのものの特徴を述べるが、その間に古い絵図を現地地形図と対比させ、また写真中でもこのことに意を用いているのが注意をそそる。ただ欲をいえば幕藩時代に既に廃城になつたもの等をも地方毎に収録してほしかつたし、もう少しメンバー中に歴史家のウエイトをおき一歩広めて旧城下町全体の景観の復原を試みてほしかつたと思う。

(各巻B4版 一九六〇年 日本城郭協会出版部発行 平均八五〇円)

(藤岡謙二郎)